

Working Paper Summary

JICA-RI Working Paper No.146

(2017年3月刊行)

The Evolving Life Improvement Approach: From Home Taylorism to JICA Tsukuba, and Beyond

Tomomi Kozaki and Yusuke Nakamura

Research Project: [主体性醸成のプロセスと要因にかかる学際的研究: 中南米における事例を中心に](#)

■付加価値

本論文では、20世紀初頭のアメリカ合衆国、続く第二次世界大戦後の日本の経験を経て中南米諸国向けに JICA つくば研修コースで構築されてきた生活改善アプローチを分析し、それを踏まえて近年途上国でも普及してきた情報通信コミュニケーション技術（ICT）を取り入れた新しい生活改善アプローチ・モデルを提案する。

■リサーチ・デザイン

論文ではまず、20世紀初頭のアメリカ合衆国と、第二次世界大戦後の日本における生活改善アプローチの特徴を考察した。そして、それらの後継アプローチとして、現在の JICA つくば研修コースにおける生活改善アプローチが、自己決定(self-determination)と自己管理(self-management)の二つの柱を持つこと、また、普及員による寄り添い(accompaniment)が重要であることを指摘した。続いて、生活改善アプローチを Mokyr (2004)のミクロ経済学モデルに基づいて再定式化し、所得向上や公的補助と対比的にその効用開発政策との関連性を示した。さらに、コスタリカ共和国の小さな協同組合の事例を、普及員が撮影したデジタル写真を使って分析し、同モデルを現場の実践と関連づけた。

■主な結論（政策的含意を含む）

これらの分析を踏まえて、生活改善アプローチの理論と実践を繋ぐための仕組みとして、写真とテキストを共有する新しいデジタル・システム、SIMEVI（Sistema de Información de Mejoramiento de Vida）の基本設計、現段階の活用状況、多様なステークホルダーが関わる今後のロードマップを提示した（<http://www.mag-jica-emv.net/>）。このシステムが、発展途上国における生活改善アプローチの「エンジン」として十分に機能するためには、制度や技能など強力なアナログ基盤が必要であることも指摘して論文の結論とした。